

# 萩原Ⅱ遺跡

北関東自動車道側道道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

# 萩原Ⅱ遺跡

前橋市埋蔵文化財発掘調査団



萩原Ⅱ遺跡出土の土器

## 序

前橋台地を用水や河川が南に向かって流れ、前橋郊外の地を水田地帯と変えていました。河川による浅い谷の形成は、古くから台地を居住区と水田区に区分けをし、人々の生活の保証を与えていました。

萩原Ⅱ遺跡はこんな土地の一つであり、古くから人々の生活との関わりが深い土地です。

すぐ東は神沢川により伊勢崎市と境をなしています。今でこそ行政区を分ける垣根となっていますが、かつては萩原Ⅱ遺跡に居住する人々に共通の恵みと災害を与えた自然です。

こんな土地に北関東自動車道路の建設が予定されました。前橋市内においては、本道を群馬県、側道の部分の発掘調査については前橋市が行うことになりました。

発掘調査の結果は、住居址8軒（4世紀1、6世紀2、9世紀1、10世紀3、不明1）と溝址1条、水田址（12世紀）が発見されました。

住居の年代は、長期にわたっていますが、居住区の西側縁沿いに新しい時代の住居があり、東部に入るに従って古くなる傾向になっています。

水出址は浅間B軽石下のものだけが確認されましたが、隣接して県埋蔵文化財発掘調査事業団が本道の発掘調査を予定しており、更に古い水出址の発見もあるかもしれません。

本道と側道が別々の時期に、加えて発掘調査を行った主体が異なるという中の調査です。そのため、両者の調査結果の付け合わせ等の作業を経て最終的な性格付けを行わなければならぬ必要が出てきています。

県埋蔵文化財発掘調査事業団が発掘後にその報告書を見ていただければ、統一した報告に近い形でご理解いただけるのですが、その前段階として、本市での側道部分の発掘調査結果の報告として一読いただき、ご指導・ご助言をいただければ幸いです。

平成10年3月25日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
団長 中西誠一

## 例　　言

1. 本報告書は、北関東自動車道側道道路改良事業に伴う萩原Ⅱ（はぎわらに）遺跡発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の遺跡コードは9 E 36である。
3. 調査主体は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団である。
4. 発掘調査の要項は次のとおりである。

調　　査　　場　　所　群馬県前橋市二之宮町2165-1番地他  
発　　掘　　調　　査　　期　　間　平成9年11月18日～平成9年12月18日  
整　　理　　・　　報　　告　　書　　作　　成　　期　　間　平成10年1月5日～平成10年3月25日  
発　　掘　　・　　整　　理　　担　　当　　者　飯田祐二・佐藤則和（前橋市埋蔵文化財発掘調査団発掘調査係）
4. 本書の原稿執筆、編集は飯田・佐藤が行った。整理作業をはじめ図版作成には、赤城美代子・阿部シゲ子・岩田敏子・生形かほる・大塚美智子・鬼塚成子・神澤とし江・桐谷秀子・佐野貴恵子・柴崎まさ子・戸丸澄江・船津明美・松田富美子・柳井晶子・湯浅道子・綿貫綾子の協力があった。
5. 発掘調査にかかわった方々は次のとおりである。（順不同）

阿部シゲ子　石川　弘　落合　忠雄　鹿沼　国藏　神澤とし江　桐谷　秀子　桜井　弘  
関口みよ子　高橋　孜　中村新太郎　奈良　岩雄　原島　サイ　福島　逸司　松倉　菊江  
矢島アイ子　柳井　晶子
6. 発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課収蔵庫で保管されている。

## 凡　　例

1. 採図中に使用した北は座標北である。
2. 採図には、建設省国土地理院発行の1/2.5万地形図（大湖）、1/5万地形図（前橋・高峰）と1/2.5千前橋市現形図を使用した。
3. 本遺跡の略称は9 E 36である。
4. 各遺構の略称は次の通りである。

H…住居址、D…土坑址、W…溝址、T…堅穴状遺構址
5. 遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。

遺構　　住居址…1/60、竈址…1/30、水田址…1/250、全体図…1/250  
遺物　　土器・石器…1/3、1/4
6. スクリントーンの使用は次のとおりである。

遺構断面図　構築面…斜線、炭化物・焼土…斑  
遺物実測図　施釉範囲…あられ、須恵器断面…黒塗り

# 目 次

序	i
例 言	ii
I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	1
1. 遺跡の立地	
2. 歴史的環境	
III 発掘調査の方法と経過	5
1. 調査方針	
2. 調査過程	
IV 基本層序	7
V 遺構と遺物	8
VI 成果と問題点	13

## 挿 図

Fig. 1 萩原II遺跡位置図	v
2 萩原II遺跡周辺遺跡図	3
3 萩原II遺跡周辺図	5
4 基本土層図	7
5 萩原II遺跡全体図	17・18
6 H-1, 2号住居址	19
7 H-3, 4, 6号住居址、竪穴状遺構址、D-4号土坑址	20
8 H-7~9号住居址、D-1~5号土坑址、W-1号溝址	21
9 古墳時代の土器(1)	22
10 古墳・平安時代の土器(2)	23
11 平安時代の土器(3)	24
12 平安時代の土器(4)	25
13 石器	26

## 図 版

- 口絵 1 萩原Ⅱ遺跡出土の土器群
- P L. 1 B調査区全景・H-1~3住居址
- P L. 2 H-2, 6, 7住居址
- P L. 3 H-6~9住居址
- P L. 4 C・D・E調査区
- P L. 5 古墳・平安時代の土器
- P L. 6 平安時代の土器、石器

## 表

Tab. 1	周辺遺跡概要一覧表	4
2	土器観察表	15
3	石器観察表	16
4	水田址計測表	16
5	畦畔集計表	16

## 抄 錄



Fig. 1 萩原日遺跡の位置

## I 調査に至る経緯

萩原II遺跡の発掘調査は、北関東自動車道側道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、平成9年11月から12月にかけて実施された。発掘調査に至る経緯は以下のとおりである。

本遺跡の発掘調査に関して、平成9年6月9日付で前橋市北関東自動車道対策室より二之宮地内の北関東自動車道側道路改良事業に伴う協議依頼がなされた。調査地は、本線部分を群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を行っていることから遺跡地であると考えられた。そこで、10月24日付で調査依頼書の提出を前橋市長に依頼した。その後、前橋市北関東自動車道対策室と協議・調整を行い、10月27日、前橋市長 萩原弥慈治より前橋市教育委員会あてに本発掘調査の依頼がなされた。前橋市教育委員会が組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団はこれを受諾し、11月18日両者の間で本発掘調査の委託契約を締結、11月21日、現地での発掘調査を開始するに至った。

なお、遺跡名称『萩原II遺跡』の『萩原』は旧地籍の小字名を採用し、群馬県埋蔵文化財調査事業団が北関東自動車道本道部分を発掘調査していることから遺跡名に『II』を付けた。

## II 遺跡の位置と環境

### 1 遺跡の立地

萩原II遺跡は、前橋市二之宮町萩原に所在する。二之宮町は前橋市の東南部にあたり、遺跡の約600m東を南流する神沢川を隔てて伊勢崎市と接している。前橋市街地からは9km程東南方向、伊勢崎市街地からは4.5km程西北方向にあたり、北1.7kmには上野国二官である二官赤城神社が鎮座する。この遺跡の西には、荒砥川・宮川・八坂用水、東に神沢川、南に広瀬川と多くの河川が南流している。

赤城山の南麓にあたるこの地は、ゆるやかな低台地が広がる中、山腹から流れ出す前記のような中小河川の侵食や山麓末端面からの湧水によって台地は樹枝状に開析され比高差は少ないが沖積地と入り組む複雑な地形となっている。

本遺跡は、標高76m前後の台地の平坦地に立地している。周囲は農村地帯であり、周辺は昭和50年代の畠場整備事業や国道17号上武バイパスの建設など開発が行われ、これに伴う発掘調査も広範囲に展開されている。

### 2 歴史的環境

萩原II遺跡の立地する前橋市東南部・荒砥地域には、赤城山南麓の丘陵性台地と沖積地とが入り組み、複雑な地形を呈しており、各時代を通じて数多くの遺跡が残存し発掘調査されている。(Tab. I 参照) 本遺跡の遺構・遺物と関連づけられるであろう周辺の歴史的環境をまとめておきたい。

旧石器時代の周辺の遺跡は、飯土井二本松遺跡(3)、飯土井中央遺跡(4)、二之宮谷地遺跡(1)、二之宮道上道下遺跡(2)がある。その他にも暗色帶とその上部から尖頭器を中心に出土した荒砥北三

木堂遺跡<sup>23</sup>、細石刃やナイフ形石器を伴う3枚の文化層が検出された頭無遺跡<sup>24</sup>がある。

縄文時代では、草創期から後期までの遺跡が数多く確認されている。その立地は、沖積地や湧水地に臨む微高地や台地上である。草創期では、荒砥北三木堂遺跡<sup>25</sup>や荒砥北原遺跡、飯土井中央遺跡<sup>26</sup>などがある。早期は、荒砥天之宮遺跡<sup>27</sup>、二之宮千足遺跡<sup>28</sup>、飯土井二本松遺跡<sup>29</sup>、飯土井中央遺跡<sup>30</sup>、今井道上道下遺跡<sup>31</sup>、荒砥北三木堂遺跡<sup>23</sup>、柳久保遺跡群<sup>29</sup>など遺跡数も多くなる。前期は、鶴谷遺跡<sup>27</sup>、荒砥天之宮遺跡<sup>28</sup>、飯土井二本松遺跡<sup>29</sup>、今井道上道下遺跡<sup>32</sup>、二之宮谷地遺跡<sup>33</sup>、柳久保遺跡群<sup>29</sup>などがあり、諸磯期が多く小規模の集落が形成されている。中期は、荒砥天之宮遺跡<sup>28</sup>、飯土井二本松遺跡<sup>33</sup>、二之宮宮東遺跡<sup>34</sup>、今井道上道下遺跡<sup>32</sup>、二之宮谷地遺跡<sup>31</sup>などがあり、加曾利E期が検出されている。後期になると、荒砥天之宮遺跡<sup>28</sup>、荒砥前原遺跡<sup>20</sup>、飯土井二本松遺跡<sup>33</sup>、今井道上道下遺跡<sup>32</sup>などがあり、晚期の遺跡はまだ発見されていない。

弥生時代は、荒砥島原遺跡<sup>35</sup>、荒砥前原遺跡<sup>20</sup>、荒口前原遺跡<sup>26</sup>で中期後半の住居址が調査されている。その他中期として、宮川遺跡<sup>36</sup>、頭無遺跡<sup>24</sup>などがある。この時期の立地も、縄文時代同様河川・生產地である沖積地を臨む微高地や台地上にある。本道部分の萩原遺跡では、堅穴住居址1軒と壺形土器が検出されている。

古墳時代になると、前期は弥生時代後期の小河川に沿って間隔をおく遺跡立地を引き継いでいると考えられる。この荒砥地域は古墳の密集地域として知られるが、前期古墳はない。5世紀中頃にはお富士山古墳<sup>27</sup>、後半に前方後円墳である今井神社古墳<sup>28</sup>が造られ、後期になると国指定史跡となっている西大室の前・中・後の三基の二子古墳をはじめ、数多くの古墳が築造される。集落も前期のものが中後期まで継続するとともに、新たな地点にも形成される。その他に荒砥荒子遺跡や梅木遺跡等で豪族居館址が発見されている。本道部分の萩原遺跡では、4世紀と6世紀の堅穴住居址17軒が検出されている。また、本遺跡西に位置する下増田越渡Ⅱ遺跡では前期の水田址が検出されている。

奈良・平安時代になると台地上に集落が増え、沖積地の水田開発が進む。微高地でも水田化されるとともに、畑作も行われ1108年の浅間B軽石の上下から遺構が検出されている。本道部分の萩原遺跡では、9世紀と10世紀の堅穴住居址22軒を検出している。また、本遺跡東に位置する新井大山岡遺跡では、As-B下水田址、9世紀代水田址、9世紀前半の堅穴住居址、溝址が検出されている。西側に位置する下増田越渡遺跡でも818年の洪水層下条里水田址とAs-B下水田址が検出されている。

また、荒砥地域は、古代、勢多郡に属し、東山道のルート上にあると推定されている。推定地付近には、勢多郡の郡衙址と考えられる上西原遺跡があり、延喜式神名帳記載の二宮赤城神社が鎮座する。今井道上道下遺跡<sup>32</sup>ではあづま道が発見され、その北には女堀の遺構がある。

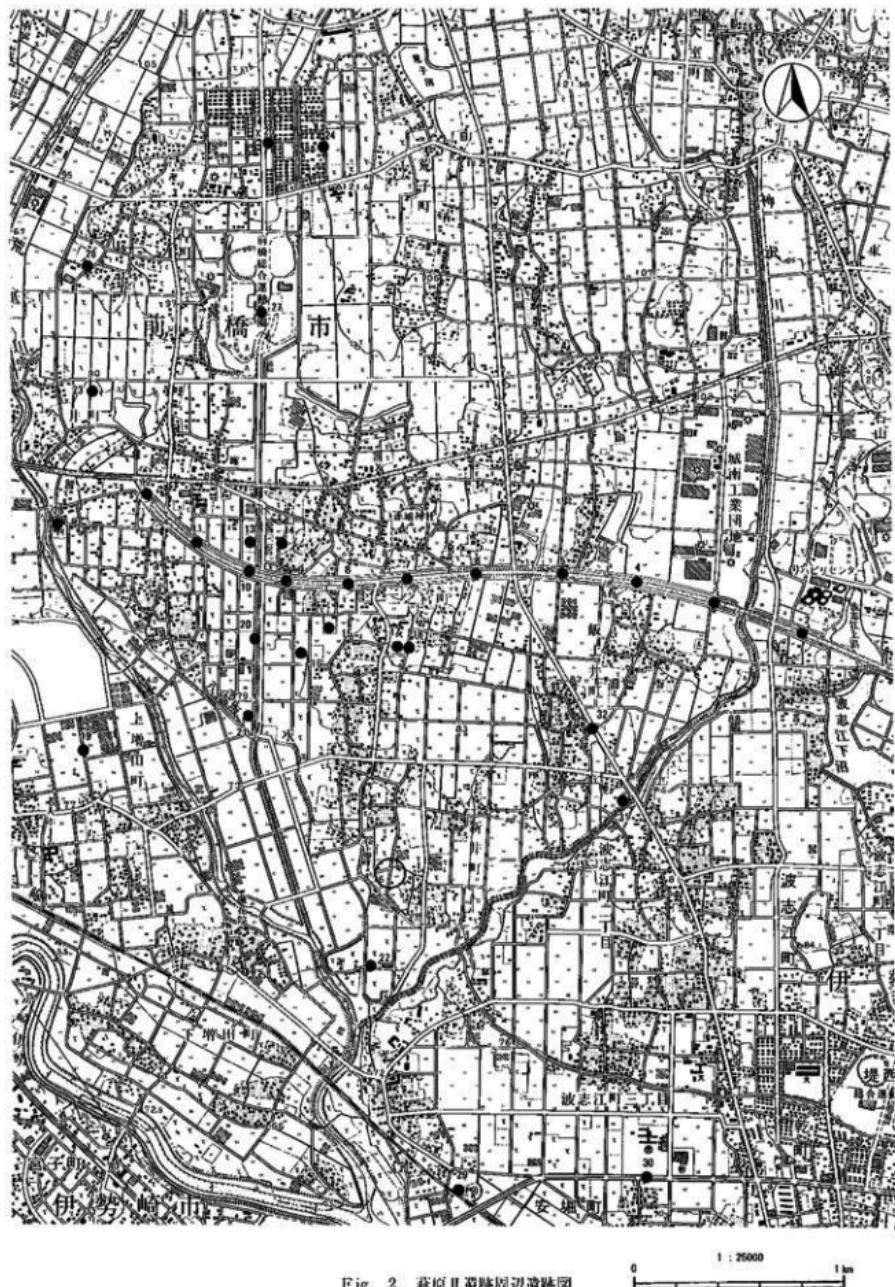


Fig. 2 萩原Ⅱ遺跡周辺遺跡図

Tab. I 周辺遺跡概要一覧表

番号	遺跡名	調査年度	主たる時代	遺跡の概要
1	萩原II遺跡	H 9	古墳・平安	住居址・水田址
2	波志江今宮遺跡	S 55・60	縄文・古墳・奈良・平安・近代	住居址・古墳・水田址・炭窯址
3	飯土井二本松遺跡	S 60	旧石器・縄文・古墳・奈良・平安	住居址
4	飯土井中央遺跡	S 60・61	旧石器・縄文・古墳・中世・近世	住居址
5	飯土井上組遺跡	S 60・61	古墳・平安	住居址
6	二之宮宮東遺跡	S 60・61	縄文・平安・中近世	住居址・水田址
7	二之宮宮下東遺跡	S 62	古墳・奈良・平安・中世	住居址・水田址・中世居館址
8	二之宮宮下西遺跡	S 61	古墳・奈良・平安	住居址・中世居館址
9	二之宮千足遺跡	S 61・62	縄文・古墳・奈良・平安・中世	住居址・水田址
10	二之宮洗橋遺跡	S 61・62	古墳・奈良・平安	住居址
11	二之宮谷地遺跡	S 61・62	旧石器・縄文・古墳・奈良・平安	住居址・水田址
12	今井道上道下遺跡	S 61・62	旧石器・古墳・奈良・平安・中世	住居址・掘立柱建物址・鐵治址
13	荒砥洗橋遺跡	S 55	古墳・奈良・平安・近世	住居址・掘立柱建物址
14	荒砥宮西遺跡	S 55	古墳・奈良・平安	住居址・水田址
15	荒砥天之宮遺跡	S 55	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	住居址
16	荒砥島原遺跡	S 55	弥生・古墳・奈良・平安	住居址・墓址・水田址
17	荒砥青柳遺跡	S 56	古墳・奈良・平安	住居址・溝址
18	荒砥青柳II遺跡	H 6	縄文・古墳・奈良・平安・中近世	住居址・溝址・井戸址
19	中原遺跡群	H 4	古墳・平安・中近世	住居址・水田址・条里大畦畔
20	宮川遺跡	S 55	弥生・古墳・奈良・平安	住居址・墓址・水田址
21	宮原遺跡	S 62	古墳	住居址・円墳
22	荒砥前原遺跡	S 51	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	住居址・円墳

## ◎その他の遺跡

- 23 荒砥三木堂遺跡 24 頭無遺跡 25 柳久保遺跡群 26 荒口前原遺跡 27 鶴谷遺跡  
 28 今井神社古墳 29 お富士山古墳 30 中組遺跡 31 赤石城址 32 宿烟古墳

### III 発掘調査の方法と経過

#### 1 調査方針

委託された調査箇所は、幅11mの北関東自動車道側道部分4カ所で西からA区、B区、C区、D区と呼称した。調査箇所は、用地買収の終わっている部分で形状は台形・三角形・長方形等と様々であった。面積はA区が40m<sup>2</sup>、B区677m<sup>2</sup>、C区164m<sup>2</sup>、D区251m<sup>2</sup>、E区5m<sup>2</sup>総計1137m<sup>2</sup>である。グリッドについては、5mピッチで西から東へX1、X2、X3…X40で表し、北から南へY1、Y2、Y3…Y10、と付番し、グリッドの呼称は北西杭の名称を使用した。なお、X0・Y0の国家座標は、第IX系のY=-59,550m、X=+38,900mである。また調査は西から表土掘削・遺構確認・杭打ちを行い、東側から遺構掘り下げ・遺構精査・図面作成を行った。そして、全景写真・遺跡全体測量を行った。図面作成は平板・簡易造り方測量で行い、主要な断面等はスケール1/10で、遺構全体図はスケール1/20で作成した。

#### 2 調査経過

平成9年11月21日、B調査区西側から重機（バックフォー0.7m<sup>3</sup>）による表土掘削を開始した。現耕作土を30~40cm掘り下げたところで、ソフトロームの地山と遺構面が現れた。翌日から鋤籠かきによる遺構確認を東部から行ったが、西部の確認は難しかった。元の地主の方の話などから、B区は昭和40年頃は畑地、50年頃は水田、そして54年頃に土地改良を行なった畑地へ。地目替え、土地改良を行なっているため遺構の残りは悪いと考えられた。特に道のあった場所から西部の遺構の残りは悪かった。調査区東部から遺構精査を開始した。土地改良の機械の爪による筋状・格子状のカクランが規則的に入っていた。

B区の作業と平行して12月1日には、C調査区の表土掘削を重機（バックフォー0.25m<sup>3</sup>）で行った。現地表面下1mから浅間B軽石（1108年降下）の純層が約10cmの厚さで現れた。その下からは、黒褐色土層の遺構面が検出された。鋤籠による表土除去を行い、翌日までには精査を完了した。南部の遺構の残存状況が特に悪かったが、畦畔を8本確認することができた。

12月2日には、D調査区西側から重機（バックフォー0.25m<sup>3</sup>）による表土掘削を行った。当日、鋤籠かけを行なったが搅乱を受け遺構を見つけることができなかつた。また同日、E調査区にトレノチを入れ遺構確認を行なった。溝を確認したが、調査区の面積が狭いため、今後の調査時に再調査することになった。

B区の調査は、順調に東部から西部に移行し、住居址・土坑を進めて行った。遺構の残りが悪いと考えられていた旧道路部分より西部からも溝址と4軒の住居址が検出された。そして、12月9日にハイライダーによる全体写真撮影を行なった。

全体写真撮影後、B調査区のH2・H3住居址の床面がまだ20cm程度下がることがわかり、その補足調査と図面作成で数日を要することとなり、現場での発掘調査を終えたのは12月18日であった。そして平成10年1月28日、埋め戻し作業を行い現地における発掘調査を完了した。

平成10年1月5日からは城南収蔵庫で報告書作成に向けて整理作業を行い、3月25日すべての作業を終了することになった。

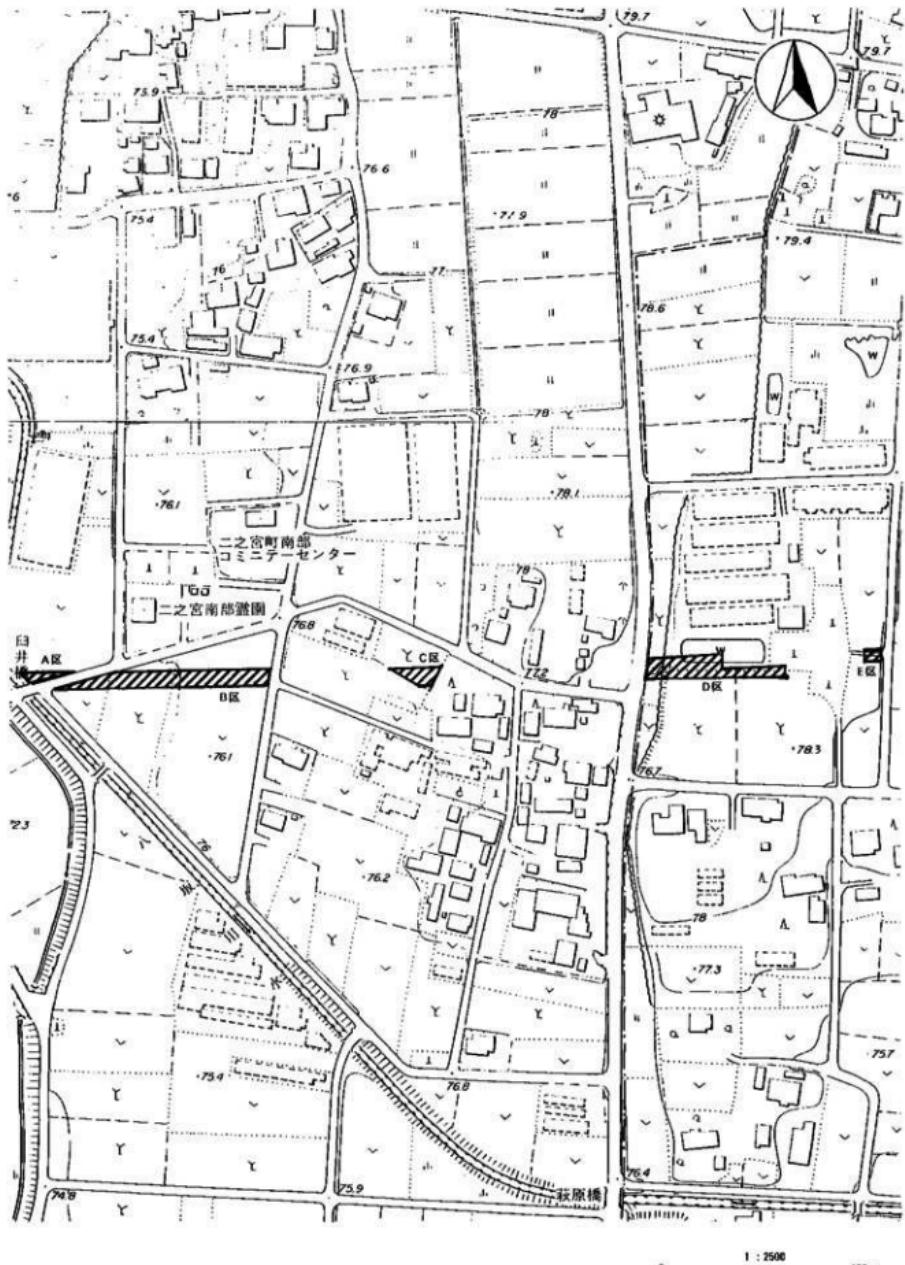


Fig. 3 萩原II遺跡周辺図

## IV 基本層序

本遺跡の層序は、台地部と低地である沖積地に二分される。台地部は、近年の圃場整備や耕作に伴い表土層の掘削が行われたため、現耕作土の下がソフトローム面となっている。ソフトロームは、赤城山の山体崩壊土砂が山麓末端部に再堆積して形成されたと考えられている。

本遺跡の層序は、場所によりその堆積状況に違いがあるため、台地部のB調査区の南東部区城外、沖積低地のC区の二か所の土層図をFig. 4に示す。なお、D区は基本的にB区と同じ層序でI層が25cm、II層がB区よりも深く続いている。

B区 (Fig. 4左。調査区外、南東部の道路。下水道工事現場)

- I層 にぶい褐色細砂層。現耕作土。
- II層 黄褐色微砂層。赤城山山体崩壊によるもの。
- III層 川砂層。

C区 (Fig. 4右。調査区南西部)

- I層 にぶい褐色細砂層。現耕作土。
- II層 暗褐色細砂層。浅間B軽石 (A s - B : 1108年)との混土層。
- III層 にぶい赤褐色微砂層。
- IV層 褐灰色粗砂層。浅間B軽石純層。明褐色の鉄分凝結あり。
- V層 黒褐色微砂層。遺構面。
- VI層 褐灰色微砂層。浅間C軽石 (A s - C : 4世紀前葉)を5%含む。
- VII層 褐灰色微砂層。浅間C軽石を10%含む。
- VIII層 灰褐色微砂層。オレンジ色の鉄分凝結あり。下部はシルト状。
- IX層 灰白色シルト層。

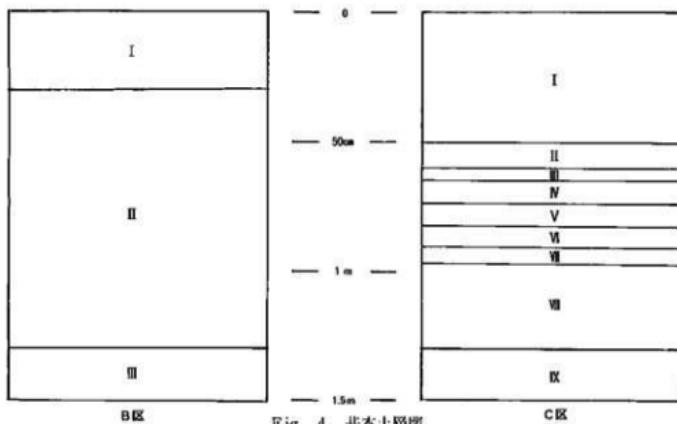


Fig. 4 基本上層図

## V 遺構と遺物

本遺跡の発掘調査では、古墳・平安時代などの住居址8軒、平安時代の水田址8面、その他に堅穴状遺構址1基、土坑址4基、溝址1条が検出された。

遺構は、土地改良が行われていたり畑地と水田の地目変更が行われていたりしたことによる搅乱があつて遺存状態は悪かった。また、ソフトロームを掘り込んで作られた住居の床面は堅緻ではなく、確認は非常に難しかった。

### 1 住居址

H-1号住居址 (B区、Fig. 6, PL. 1)

- 位 置 X15~16、Y3グリッド ○面積 (4.01m<sup>2</sup>) ○方位N-61° - E
- 形 状 プランのほとんどが調査区外であるが、長軸(3.70m)、短軸(2.10m)で方形を呈すると思われる。壁高は平均22cmを測る。
- 床 面 ほぼ平坦な床面であるが、堅緻面は認められず。柱穴等は検出されず。
- 竈 検出されず。
- 遺 物 遺物総数は土師器87点、須恵器4点、うち土師壺2点を図示した。
- 備 考 出土遺物の特徴から、6世紀末と考えられる。

H-2号住居址 (B区、Fig. 6, PL. 2)

- 位 置 X14~15、Y3~4グリッド ○面積 15.11m<sup>2</sup> ○方位N-67° - E
- 形 状 長軸4.03m、短軸3.83mの方形を呈する。壁高は平均36cmを測る。
- 床 面 ソフトローム面で検出が難しかった。ほぼ平坦な床面。柱穴等は検出されず。
- 竈 東壁に設置。全長139cm、焚口部幅24cmを測る。
- 貯藏穴 北東隅より検出。
- 遺 物 遺物総数は土師器345点、須恵器4点、うち土師壺、土師甌、土製支脚の9点を図示した。
- 備 考 出土遺物の特徴から、6世紀中期と考えられる。

H-3号住居址 (B区、Fig. 7, PL. 1)

- 位 置 X13、Y3~4グリッド ○面積 (8.32m<sup>2</sup>) ○方位N-61° - W
- 形 状 プランの北半分が調査区外のため南北が確定できなかったが、長軸(3.64m)、短軸(2.39m)の方形を呈すると思われる。壁高は浅い部分で4cm、深い部分が33cm。
- 床 面 住居東側が一段深く掘り込まれ、二段状となっている。柱穴等は検出されず。
- 竈 検出されず。
- 遺 物 遺物総数は土師器75点、須恵器6点、うち土師甌1点を図示した。

○備考 出土遺物の特徴から、4世紀と考えられる。しかし、形状が二段状、遺物等も搅乱の影響を受けている可能性があり、検討の余地あり。

#### H-4号住居址 (B区、Fig. 7, PL. 1)

○位置 X11~12、Y3グリッド ○面積 (3.65m<sup>2</sup>) ○方位N-86°-E

○形状 北側が調査区外のため南北が、また、東西もD-4と重複するため確定できないが、長軸 (4.05m)、短軸 (0.93m) の方形を呈すると思われる。壁高は平均6cmを測る。

○床面 ほぼ平坦な床面。柱穴等は検出されず。

○竈 検出されず。

○遺物 遺物総数は土師器12点。

○備考 出土遺物の特徴からは時代判定はできず、堅穴状造構となる可能性もある。

#### H-5号住居址 (B区、Fig. 7, PL. 1)

○プラン確認の際は円形を呈し、住居と思われ付番したが確定できないために堅穴状造構とした。そのため欠番扱いとなった。

#### H-6号住居址 (B区、Fig. 7, PL. 2)

○位置 X4~5、Y3~4グリッド ○面積 (8.71m<sup>2</sup>) ○方位N-85°-E

○形状 プランの北部が調査区外のため南北が確認できなかったが、長軸 (3.50m)、短軸 (2.50m) の方形を呈すると思われる。壁高は平均11cmを測る。

○床面 ほぼ平坦な床面。柱穴等は検出されず。

○竈 検出されなかつたが、北東部に焼土を確認。北竈になる可能性あり。

○遺物 遺物総数は土師器114点、須恵器8点、うち土師壺、土師壺、土師墨書片の4点を図示した。

○備考 出土遺物の特徴から、9世紀中期と考えられる。

#### H-7号住居址 (B区、Fig. 8, PL. 2)

○位置 X3~4、Y3~4グリッド ○面積 6.36m<sup>2</sup> ○方位N-6°-E

○形状 長軸2.66m、短軸2.40mの方形を呈する。壁高は平均21cmを測る。

○床面 ほぼ平坦な床面。柱穴等は検出されず。

○竈 東壁に検出。全長90cm。焚口部幅25cmを測る。

○遺物 遺物総数は土師器200点、須恵器55点、うち土師質高台壺、須恵壺、須恵高台壺、土師壺、土師質壺、土師質羽釜の7点を図示した。

○備考 出土遺物の特徴から、H-8より古い10世紀後半と考えられる。

#### H-8号住居址 (B区、Fig. 8, PL. 3)

- ◎位 置 X 2~3、Y 3~4 グリッド ◎面積 11.07m<sup>2</sup> ◎方位 N-82° - E
- ◎形 状 東部がH-7と近接するため確定はできないが、長軸3.44m、短軸3.24mの方形を呈すると思われる。壁高は平均16cmを測る。
- ◎床 面 ほぼ平坦な床面。柱穴等は検出されず。
- ◎竈 H-7と東壁の竈部分が重複していたと考えられるが、明確な範囲確定はできず。
- ◎遺 物 遺物総数は土師器837点、須恵器111点、灰釉陶器3点、うち土師質壺、土師質高台壇、須恵高台壇、土師甕、須恵大甕片の5点を図示した。
- ◎備 考 出土遺物の特徴から、H-7より新しい10世紀後半と考えられる。

#### H-9号住居址 (B区、Fig. 8, PL. 3)

- ◎位 置 X 2、Y 4~5 グリッド ◎面積 (3.04m<sup>2</sup>) ◎方位 N-2° - W
- ◎形 状 プラン西側が調査区外のため確定できないが、長軸3.31m、短軸(0.97m)の隅丸方形を呈すると思われる。壁高は平均27cmを測る。
- ◎床 面 ほぼ平坦な床面。柱穴等は検出されず。
- ◎竈 東壁に検出。全長69cm。焚口部幅44cmを測る。
- ◎遺 物 遺物総数は土師器184点、須恵器51点、灰釉陶器4点、うち土師壺、土師質壺、長頸瓶の4点を図示した。
- ◎備 考 出土遺物の特徴から、10世紀後半と考えられる。

### 2 穴状遺構址

#### T-1 穴状遺構址 (Fig. 7, PL. 1)

- ◎位 置 X 12~13、Y 4~5 グリッド ◎面積 (5.91m<sup>2</sup>) ◎方位 N-85° - E
- ◎形 状 プラン確認時は、長軸3.31m、短軸(0.97m)の円形を呈したが、D-2と重複。壁高は平均6cmを測る。南側がX域外。
- ◎遺構面 ほぼ平坦な床面。
- ◎遺 物 遺物総数はD-2も含めて、土師器126点、須恵器2点、灰釉陶器2点であった。
- ◎備 考 出土遺物の特徴からは時代判定はできなかった。

### 3 溝址

#### W-1号溝址 (Fig. 8, PL. 1)

- ◎位 置 X 7、Y 3~5 ライン
- ◎形 状 B区の西部を南北に横切る形で検出。総延長8.66m、幅0.87m~1.18m、深さ32cm~50cm。

- 遺物 遺物総数は土師器82点、須恵器28点、うち土師質高台壇1点を図示した。
- 備考 構築時期は、埋土にA s - C軽石が混じりA s - B軽石を含まないことや10世紀中頃の土師質須恵器が出土していることから、同時期もしくはそれ以降A s - B降下前と考えられる。

#### 4 土坑址

D-1号土坑址 (Fig. 8, PL. 2)

○位置 X14, Y3グリッド

○形状等 H-2の北側に位置する。長径1.48m、短径1.02mの楕円形を呈し、確認面からの深さ51cmを測る。断面はゆるやかな逆台形を呈する。

○遺物 総数は土師器9点。

○備考 時代判定はできず。

D-2号土坑址 (Fig. 7, PL. 1)

○位置 X12, Y5グリッド

○形状等 プラン確認の際は円形の堅穴状遺構の西隣に位置したが、掘り進めるうちに堅穴状遺構と重複した。南側が区域外。詳しくは堅穴状遺構を参照のこと。

D-3号土坑址 (Fig. 8, PL. 1)

○位置 X11~12, Y5グリッド

○形状等 長径1.28m、短径1.00mの楕円形を呈し、確認面からの深さ32cmを測る。断面はゆるやかな逆台形を呈する。南側が区域外。

○遺物 総数は土師器75点、須恵器1点。

○備考 時代判定はできず。

D-4号土坑址 (Fig. 7, PL. 1)

○位置 X12, Y3グリッド

○形状等 長径1.48m、短径0.75mの楕円形を呈し、確認面からの深さ40cmを測る。断面はゆるやかな逆台形を呈する。H-4を掘り込む形で重複。北側が区域外。

○遺物 総数はH-4に含まれる。

○備考 時代判定はできず。

D-5号土坑址 (Fig. 8, PL. 1)

○位置 X16~17, Y4グリッド

- ◎形状等 長径1.20m、短径0.74mの梢円形を呈し、確認面からの深さ37cmを測る。断面はゆるやかな逆台形を呈する。東側が区城外。
- ◎遺物 総数は土師器30点、灰釉陶器1点。
- ◎備考 時代判定はできず。

## 5 水田址

### ◎平安時代 (Fig. 5, P.L. 4)

C区において水田址が確認できた。現地表面下約60cmからA s - Bテフラ層（浅間B軽石：1108年）の堆積が約10cm検出され、その下に黒褐色土の遺構面を約10cmの厚さで確認できた。精査を進めたが、畦畔の確認は難しかった。8枚の水田址を確認することはできたが、調査区東南部では特に残存状況が悪く畦畔の確認がほとんどできなかった。概して水田面の凹凸は少なく平坦であり、遺物・足跡等は検出されなかった。

A s - C（4世紀初頭）混土地面での確認も行ったが、水田耕作された形跡はなかった。

## 6 グリッド出土遺物

B区のみで出土。小片を含め土師器748点、須恵器27点、灰釉陶器12点が出土した。図示できた遺物は土師壺、土師質甕、土師質羽釜の4点である。圃場整備による搅乱により、離れた遺構・グリッドでも接合し合うものもあった。古墳時代の土師壺・甕から10世紀代の羽釜まで出土した。

## V 成果と問題点

今回の発掘調査では、古墳時代と平安時代の住居址と A s - B (浅間B軽石: 1108年) 下の水田址が検出された。本遺跡周辺は、荒砥南部圃場整備事業や北関東自動車道建設に伴う大規模な発掘調査が行われ、この地域の歴史が解明されつつある。

以下、今回の発掘調査で明らかになったことを、住居址、水田址の遺構ごとにまとめてみたい。

### ◎住居址

合計 8 軒の堅穴住居址を確認した。その全ては、赤城山の山体崩壊に伴う黄褐色微砂層の微高地である B 区から検出された。遺構は 4・6 世紀の古墳時代のものと、9・10 世紀の平安時代のものとに大別される。

古墳時代の遺構は、4 世紀代の堅穴住居址 1 軒 (H-3)、6 世紀代の堅穴住居址 2 軒 (H-1, 2) を B 区東部で検出した。H-2 は東竈を有し、主軸は北東方向を向く。土師坏、甕、瓶、土製支脚が出土した。H-3 は、三角文・簾状文・波状文の入った土師器の甕の口縁部分が出土した。これから時代判定を 4 世紀としたが、住居址北半分が調査区外であることや住居址の形状が東側に一段低い段状に掘り込まれていること、さらには昭和 50 年代の圃場整備の際に擾乱が調査区内にかなり入っていることから検討の余地がある。

平安時代の遺構は、9 世紀代の堅穴住居址 1 軒 (H-6)、10 世紀代の堅穴住居址 3 軒 (H-7, 8, 9) と同時期と考えられる溝 1 条を B 区西部で検出した。H-7・8・9 はそれぞれ東竈を有し、主軸は東方向を向く。

本調査区のみの住居址の傾向とすると、古墳時代のものが調査区東側から、平安時代のものが西側から検出された。しかし、群馬県埋蔵文化財調査事業団が行った北関東自動車道本線部分の調査の成果と照合してみるとこの傾向はあってはならない。

今回の調査 (B 区) と本道部分の調査を合わせて検出した住居址は、4 世紀 6 軒、6 世紀 14 軒、9 世紀 15 軒、10 世紀 11 軒となる。それぞれの時代の住居の分布のおおまかな傾向は、4 世紀は南北方向に点在、6 世紀は北東-南西方向に伸び主に北々東の竈、9 世紀は東部に集中し主に東竈、10 世紀は北西-南東方向に伸び東竈が主である。このような傾向から、時代によって谷地にはさまれた微高地の上に規則性をもって集落が形成され、住居が配置されたと考えられる。

住居址は、4 世紀から継続するものではなく、4・6・9・10 世紀と間隔を置いて検出されている。また、住居が断絶した 5 世紀中頃に造られた約 1.5km 南東のお富士山古墳と本遺跡の集落との関係や、周辺の集落遺跡・遺構・水田址の消長等総合的に検討すべき問題点が多い。

### ◎水田址

8 枚の水田址を C 区で確認した。遺構は、A s - B (浅間B軽石: 1108年) による埋没で平安時代のものである。それ以前 A s - C (4 世紀初頭) 混土の水田址等の検出はできなかった。

水田址遺構面の標高は、北東部の 76.30m を最高点で南部の 76.10m を最低点とする。比高差 0.2m、北東から南西へ約 15/1000 の勾配がある。調査区範囲が圃場の一部で 164m<sup>2</sup> と狭いため、水田区画については完全に一区画をなす水田は検出されなかった。水田址の区画は、完全に一区画をなす水田址が検出されなかつたため断定はできないが、方形・台形の面積の少ないものと想定できる。

畦畔は直線であるが方向の規則性をもたず、畦畔の交点は直行しないで T 字形に交わっている。

畦畔の残存状況は東南部が特に悪く、形状は後世の圧縮により全体的に偏平な台形状、またはカマボコ形に変形しており、高さは1~3cm、下幅は56~82cm、上幅は26~42cmである。これらの水田址は、東側を流れる小河川によって侵食されたわずかな沖積低地を地形に合わせた形の不定形の水田にし、耕作していたと考えられる。

配水については水口が検出されなかつたためわからないが、同時代の水田址などから上の水田から下へ水をオーバーフローさせ順次標高の低い水田に流し込む、「かけ流し」の方法がとられていたと考えられる。水の流れは、標高の高い北東方向から低い南西方向に流れていたと思われる。

#### ◎住居址と水田址の関係

今回の調査では、平安時代造構面で住居址（B区）・水田址（C区）の検出はできた。この水田址は、台地を開削した河川の谷地に作られた不定形のもので比較的狭い面積のものである。古墳時代の住居址の検出はできたが、水田址の検出はできなかった。しかし、荒砥川に合流する宮川左岸低地に位置し、本遺跡の西側に隣接する下増田越渡遺跡で、古墳時代前期（A s - C後）と平安時代（A s - B下）の水田址が検出され、東隣の新井太田閑遺跡でも、平安時代（A s - B下）の水田址が検出され、それ以前の水田耕作も想定されている。

のことから、本遺跡の集落とC区の水田址・下増田越渡遺跡・新井太田閑遺跡は集落と生産域との関係であったと考えられる。また、水田址の検出時期と住居址の検出が途切れる時代（5、7世紀）との間にも何らかの関係があったことも想定できる。

#### ◎まとめ

以上のことから本遺跡をまとめてみる。

- ・住居址は、4・6・9・10世紀のもので時代の間隔をおいて検出される。
- ・C調査区は、A s - B（浅間B軽石）によって埋没した平安時代の水田址である。
- ・水田址は、谷地状の傾斜の大きい場所に作られた不定形のものである。
- ・B調査区の住居址の分布状況は、それぞれの時代によっておおまかな規則性をもつ。
- ・B調査区の住居址とC調査区の水田址、あるいは西隣の下増田越渡遺跡、東隣の新井太田閑遺跡の水田址は、集落と生産域の関係であり、お富士山古墳との関係も考えられる。

今回の発掘調査は、北関東自動車道の側道部分のみという調査範囲の限られたものであった。今後は、本線部分の調査結果との照合・考察も必要となる。その結果、面としての遺跡の位置付けが可能となるであろう。多くの問題点が浮かび上がった調査であったが、今後の調査の進行により、より明確な結論が導き出され、地域の歴史が一層解明されることを期待したい。

#### 参考文献

- 『年報』16 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997  
『六供下堂木II遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1997  
『中原遺跡群』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1992~1995  
『荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989  
『地域をつなぐ 未来をつなぐ』—上武道路埋蔵文化財22年の軌跡—  
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995

Tab. 2 土器観察表

番号	出土位置	器 形	大きさ 口径 器高	成・整 形 方 法		備 考	Fig.
				①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	口縁・脇部	底 部	
1 H-1	土師甕	14.4 -	①中粒②良好③にぶい赤④1/6	外輪。横撇で。施削り。	欠損。		9
2 H-1	土師甕	15.2 -	①細粒②良好③にぶい赤④2/5	外輪。横撇で。施削り。	欠損。		9
3 H-2	土師甕	13.8 6.5	①中粒②良好③赤④1/4	ほぼ直立。横撇で。施削り。			9
4 H-2	土師甕	12.4 6.1	①細粒②良好③赤④1/2	ほぼ直立。横撇で。	施削り。	外縁あり。	9
5 H-2	土師甕	13.3 5.8	①細粒②良好③赤④5	外輪。横撇で。	施削り。	外縁あり。	9
6 H-2	土師甕	- -	①細粒②良好③にぶい赤④1/5	欠損。	施削り。	施削り。	9
7 H-2	土師甕	(20.8) -	①細粒②良好③にぶい赤④1/8	外反。横撇で。	施削り。	欠損。	9
8 H-2	土師甕	- -	①細粒②良好③灰褐色④底のみ	欠損。	施削り。	施削り。	9
9 H-2	土師甕	- -	①中粒②良好③初④底部のみ	欠損。	施削り。	施削り。	10
10 H-2	土師甕	- -	①細粒②良好③にぶい赤④底部1/5	外反。横撇で。	施削り。	欠損。	内面施磨き。
11 H-2	土製支脚	- 10.1	①中粒②良好③赤④5	側外面に指痕痕。	脇部横撇で。	カマド支脚。	10
12 H-3	土師甕	- -	①細粒②良好③赤④1/5	外輪。三角文。墨状文。波状文。	欠損。		10
13 H-6	土師甕	(12.1) 3.4	①細粒②良好③赤④1/4	内溝。横撇で。施削り。	施削り。		10
14 H-6	土師甕	12.1 3.1	①細粒②良好③明赤褐④完形	外輪。横撇で。施削り。	施削り。		10
15 H-6	土師甕	18.4 -	①細粒②良好③にぶい赤褐④1/4	外反。横撇で。	施削り。	欠損。	10
16 H-6	土師片	- -	①細粒②良好③にぶい赤④-	欠損。		欠損。	外外面に墨苔。
17 H-7	土師陶冶塊	12.9 5.6	①中粒②良好③赤④2/3	外輪。輪轍。	回転糸引き付け高台。		10
18 H-7	須恵坏	12.7 4.5	①細粒②良好③灰④1/3	外反。輪轍。	回転糸引き率調整。		10
19 H-7	須恵高台塊	16.6 5.8	①細粒②極良③灰白④1/4	外輪。輪轍。	繩引出し高台。	灰釉。虎渋山。	10
20 H-7	土師甕	(18.2) -	①細粒②良好③赤④1/4	外輪。横撇で。施削り。	欠損。		11
21 H-7	土師質甕	22.2 -	①細粒②良好③赤④1/2	外輪。横撇で。施削り。	欠損。	土並。	11
22 H-7	土師質羽釜	19.8 -	①細粒②良好③赤④5	内輪。輪轍。	欠損。	蹲三角形。	11
23 H-7	土師質羽釜	(27.3) -	①細粒②良好③にぶい赤褐④1/5	直立。輪轍。	欠損。	蹲三角形。	11
24 H-8	土師質坏	12.0 -	①細粒②良好③にぶい赤褐④完形	外輪。輪轍。	回転糸引き率調整。		11
25 H-8	土師質高台塊	(14.9) 5.4	①細粒②良好③にぶい灰黄④2/3	外輪。輪轍。	回転糸引き付け高台。		11
26 H-8	須恵高台塊	(13.7) 5.1	①細粒②良好③灰黄褐④2/3	外輪。輪轍。	回転糸引き付け高台。		11
27 H-8	土師甕	(21.7) -	①細粒②良好③にぶい赤④1/4	外反。横撇で。	施削り。		12
28 H-8	須恵塊	- -	①細粒②極良③赤④口縁部1/10	口唇部に縞帶。波状文。	欠損。		11
29 H-9	土師甕	12.0 3.8	①中粒②良好③赤④1/4	外輪。横撇で。施削り。	施削り。		12
30 H-9	土師質坏	13.2 4.4	①中粒②良好③褐灰④6/6	外反。輪轍。	回転糸引き率調整。	外外面にスス付着	12
31 H-9	土師質坏	12.4 3.8	①中粒②良好③明褐灰④完形	外反。輪轍。	回転糸引き率調整。	外外面にスス付着	12
32 H-9	長頸瓶	- -	①細粒②赤③オリーブ灰④口縁部1/5	口縁部内外間に縞帶。外縁欠損	欠損。	灰釉。	12
33 W-1	土師質高台塊	13.8 4.4	①細粒②良好③灰黄④完形	外反。輪轍。	回転糸引き付け高台。	外外面にスス付着	12
34 X 8, Y 4	土師質羽釜	17.2 -	①細粒②良好③灰白④1/8	内輪。輪轍。	欠損。	蹲三角形。	12
35 X 10, Y 4	土師坏	13.9 4.7	①細粒②良好③赤④1/6	外輪。横撇で。	施削り。	外縁あり。	12
36 X 10, Y 4	土師質甕	16.2 -	①細粒②良好③赤④口縁部1/4	外反。横撇で。	欠損。		12
37 X 7, Y 5	土師質羽釜	20.9 -	①細粒②良好③淡黄④1/7	内輪。輪轍。	欠損。	口唇部外反。蹲三角形。	12

註) 表の記載は以下の基準で行った。

①胎土は、細粒(0.9mm以下)、中粒(1.0~1.9mm以下)、粗粒(2.0mm以上)とした。

②焼成は、極良、良好、不良の3段階。

③色調は、土器外面で観察し、色名は新版標準土色帖(小山・竹原1976)によった。

④大きさの単位はcmであり、現存値を記載した。

T a b . 3 石器観察表

番号	出土位置	器種	長 幅 厚 重さ	石 材	備 考	Fig
1	H-9	磨石	13.0 10.8 4.4 900g	玄武岩	周間・偏平面に使用痕	13
2	H-9	凹石	14.6 11.9 3.5 774g	泥岩		13
3	H-9	凹石	9.1 10.0 1.8 240g	泥岩	裏面・下部欠損	13
4	H-9	石皿	16.5 14.2 3.9 1.1kg	石英閃綠岩		13
5	H-7	蕭袖石	25.7 17.2 11.8 4.9kg	角閃石安山岩	上下面以外に加工痕	13
6	H-8	砥石	9.8 4.3 3.2 290g	砥沢石	すべての側面に使用痕あり	13

註) 表の記載で、長さ・幅・厚さの単位はcmである。

T a b . 4 水田址計測表

番号	面 積 m <sup>2</sup>	東 畦 m	西 畦 m	南 畦 m	北 畦 m	形 状
1	(10.49)	( 3.10)	—	( 7.18)	—	方形
2	(13.24)	( 1.82)	—	—	( 7.18)	方形
3	(11.82)	( 3.80)	( 1.46)	5.10	—	台形
4	(26.45)	( 5.78)	( 3.44)	—	5.10	台形
5	(25.22)	( 3.48)	( 1.02)	8.40	—	方形
6	(20.36)	( 8.64)	( 9.44)	—	3.96	台形
7	(—)	( 2.90)	( 8.64)	—	3.92	—
8	(—)	—	( 2.90)	—	( 0.66)	—

註) 水田址計測・畦畔一覧表の記載は以下の基準で行った。

- ①水田址面積の算出については1/40の縮尺でプランメーター(ローラー板式・レンズ式)による3回計測平均値を使用した。なお、少数点以下3桁は四捨五入した。
- ②水田址の面積・各畦畔の長さの確認値は( )で示した。

T a b . 5 畦畔集計表

番号	グリッド X Y	方 位 N - - E	上 幅 cm	下 幅 cm	高 さ cm	方 向
1	X30 , Y 3	N-30° -E	2 8	6 0	1	南北
2	X29~30, Y 3	N-68° -W	2 6	5 8	1	東西
3	X30~31, Y 3	N-71° -W	2 5	5 6	2	東西
4	X31 , Y 2~4	N-13° -E	2 9	6 0	1	南北
5	X31~33, Y 2~4	N-53° -W	4 2	8 2	2	東西
6	X31~33, Y 3~4	N-31° -E	2 6	5 8	2	南北
7	X32~33, Y 3~4	N-29° -E	4 0	7 5	2	南北
8	X33 , Y 3	N-33° -E	—	—	3	南北

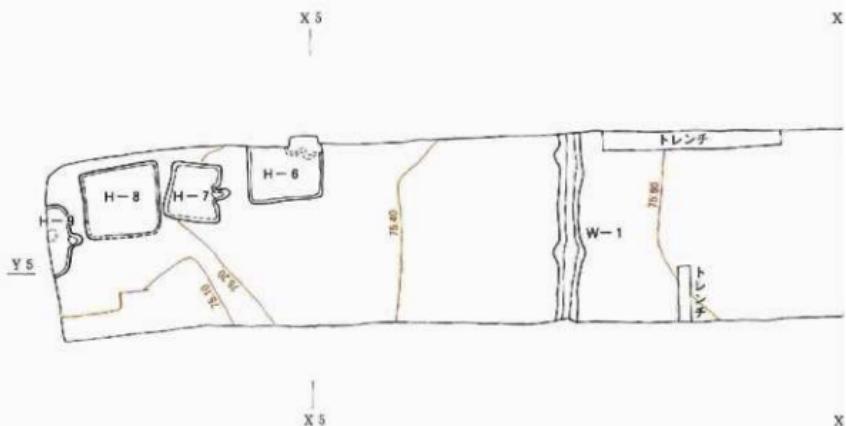
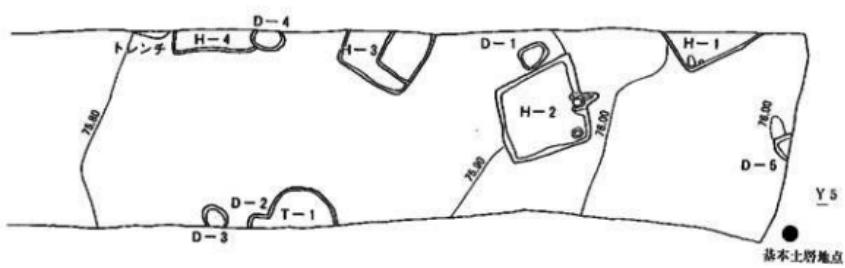


Fig. 5 萩原Ⅱ遺跡

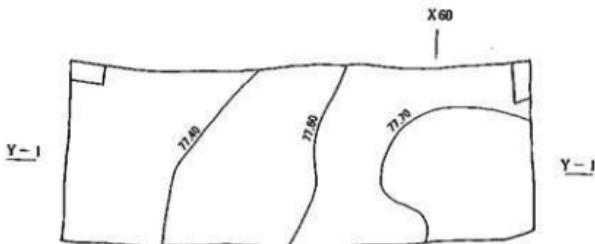
10

X15

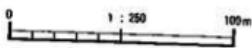


10

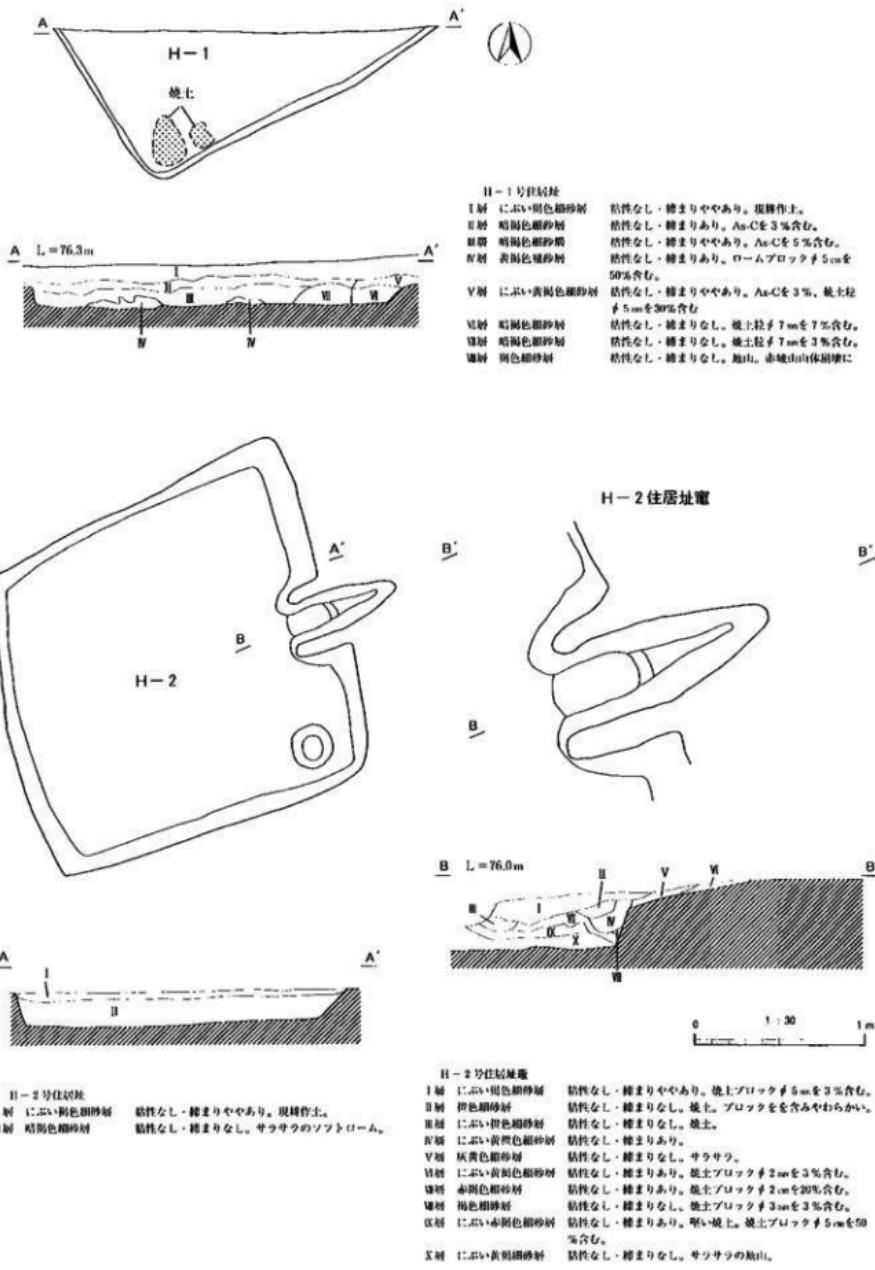
X15



X60



全体図



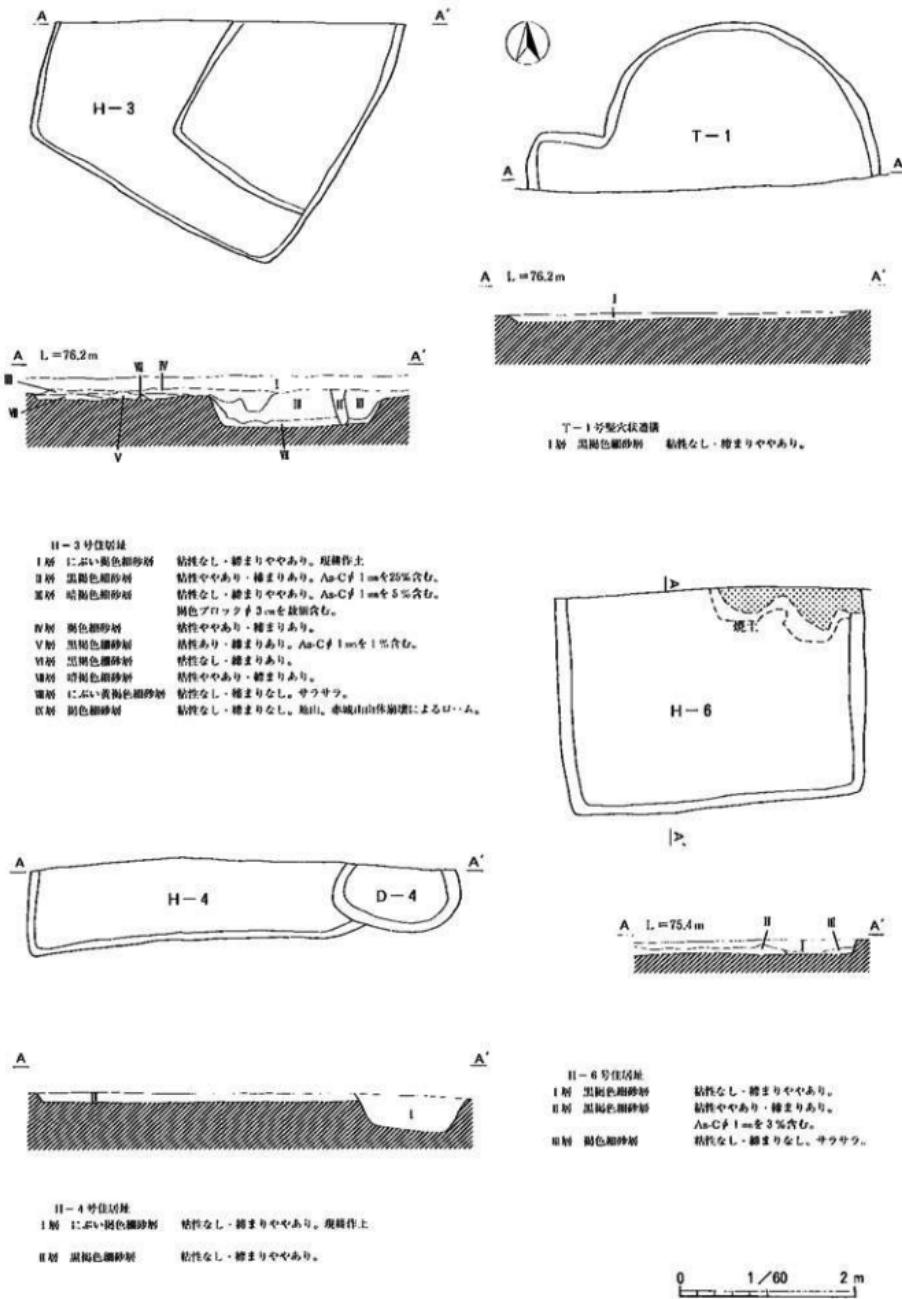


Fig. 7 H-3・4・6号住居址、窓穴状遺構、D-4土坑址

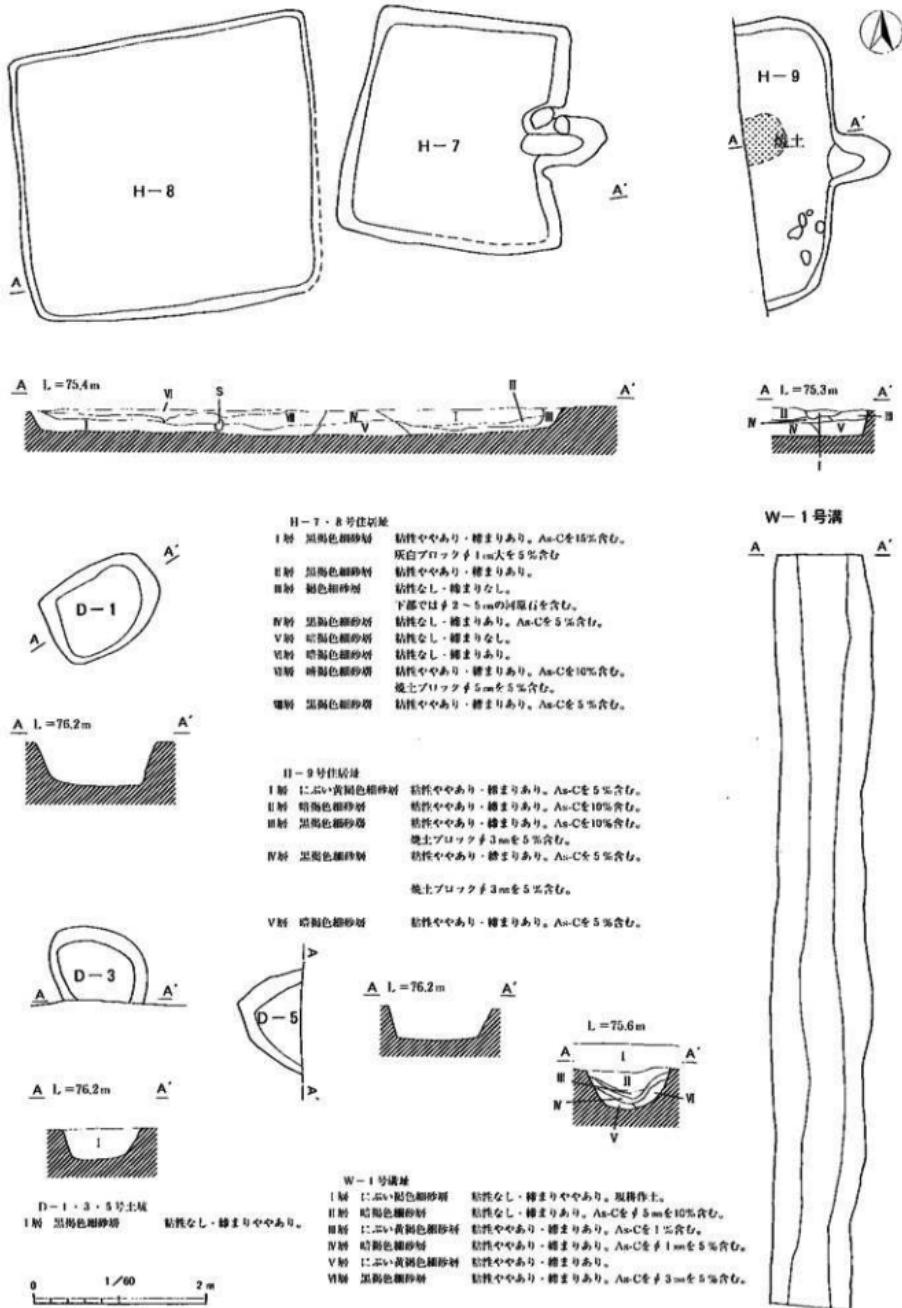
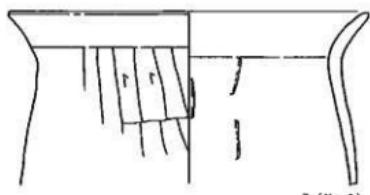
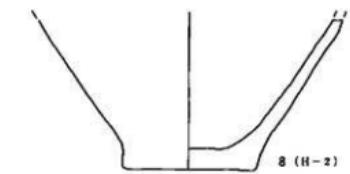
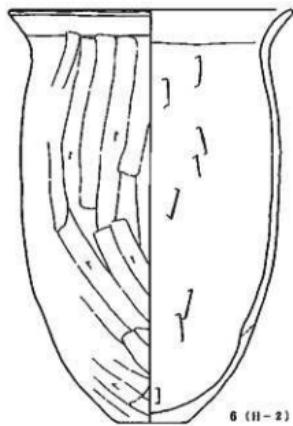
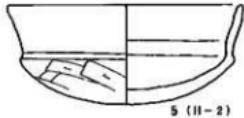
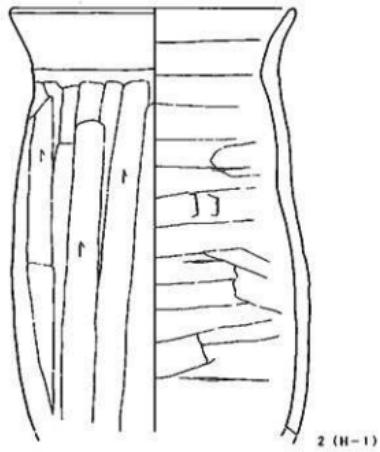
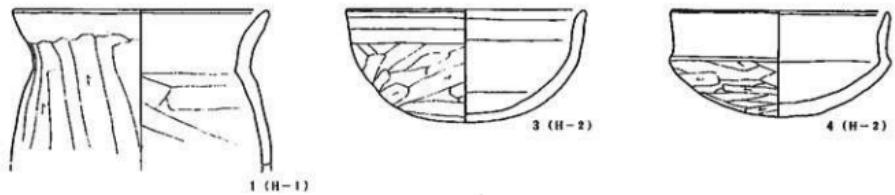


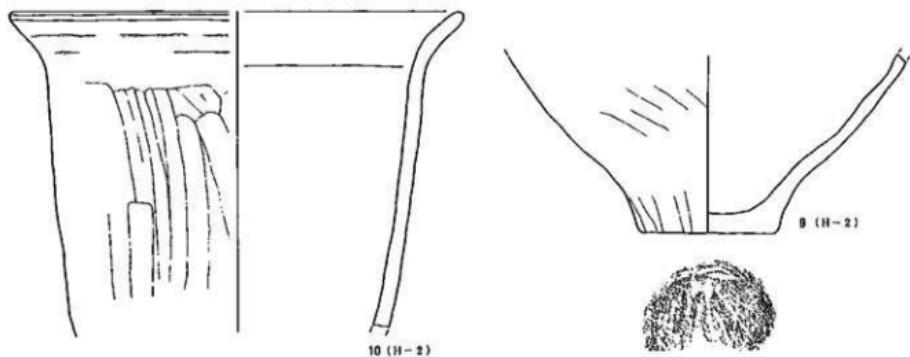
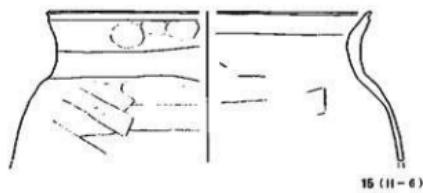
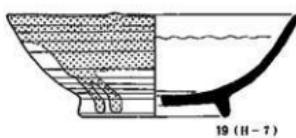
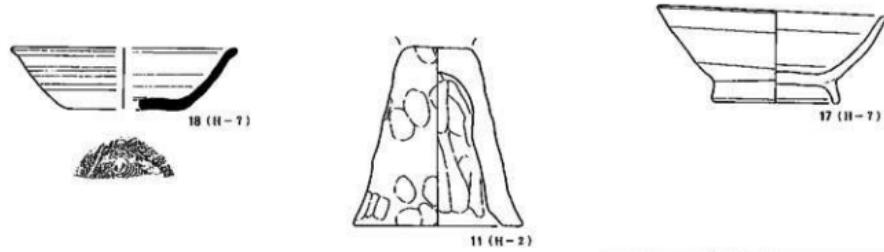
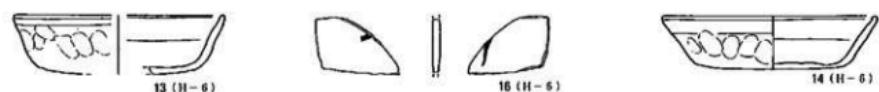
Fig. 8 II-7 ~ 9号住居址、D-1 ~ 5号土壌、W-1号溝址



0 1 : 4 10cm  
(8)

0 1 / 3 10cm  
(1 - 5 - 7 - 8)

Fig. 9 古墳時代の土器(1)



0      1/3      10cm

Fig. 10 古墳・平安時代の土器(2)

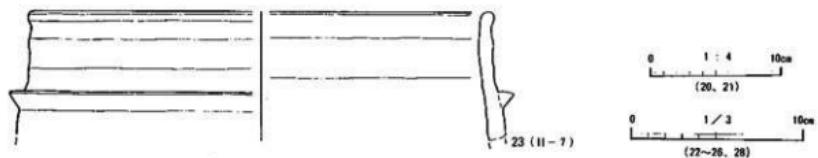
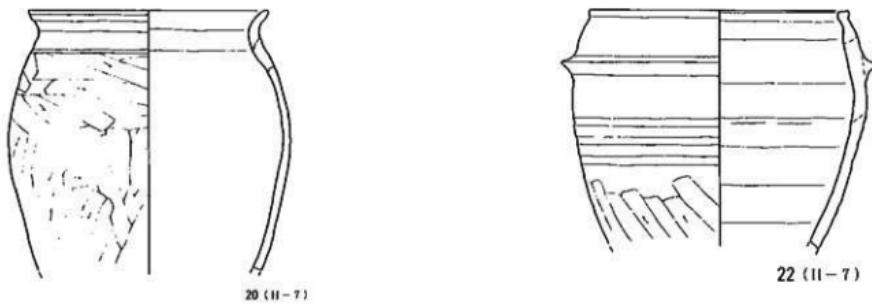
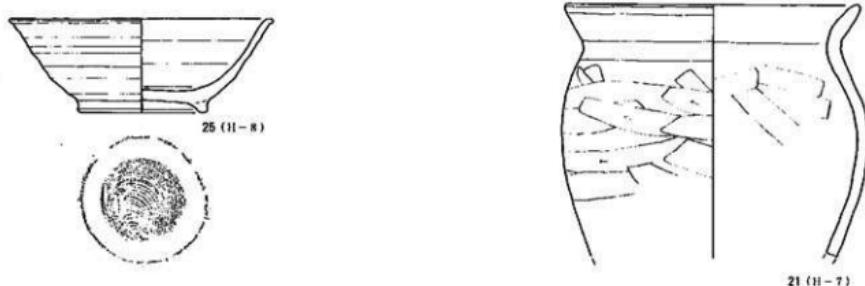
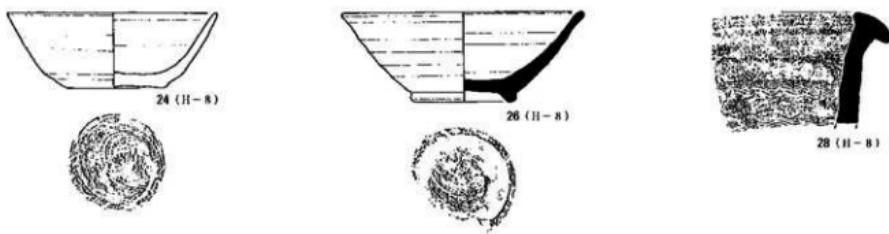
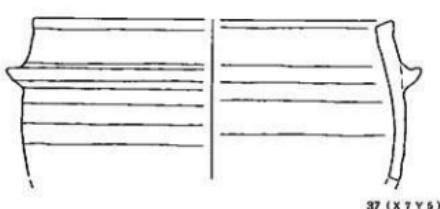
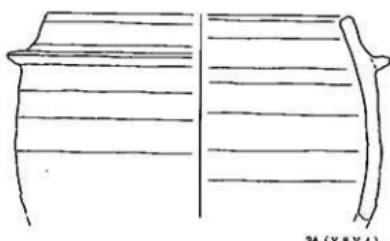
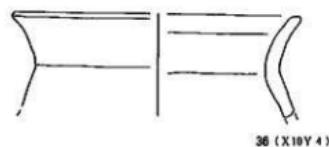
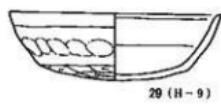
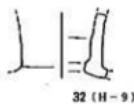


Fig. II 平安時代の土器(3)



0 1 : 4 10cm  
(27)

0 1 / 3 10cm  
(29~37)

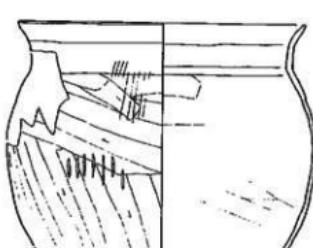
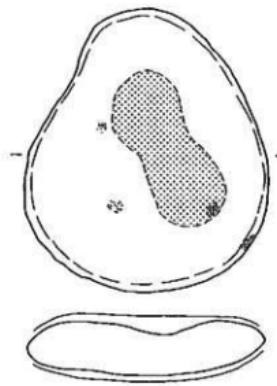
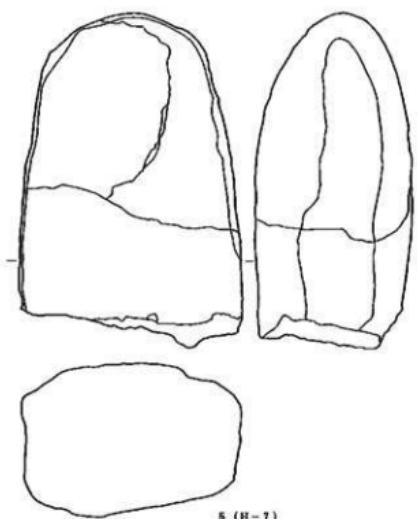
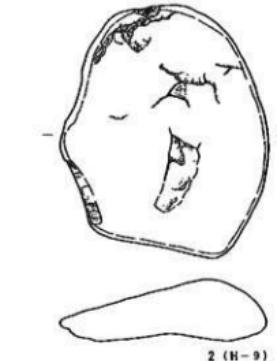
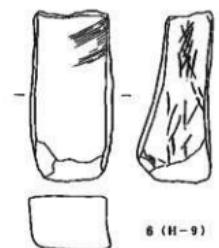
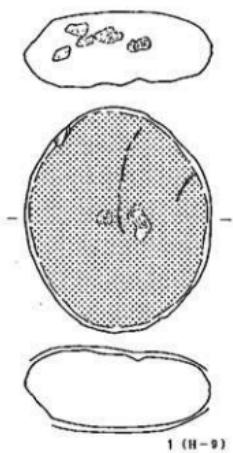


Fig. 12 平安時代の土器(4)



0 1 : 4 10cm  
(5)

0 1 : 3 10cm  
(1~4, 6)

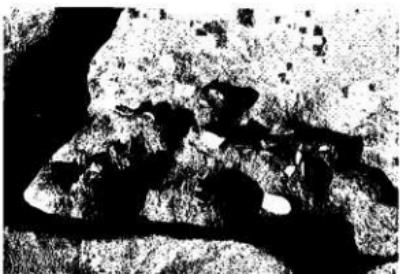
Fig. 13 石器



1. B区全景(西から)



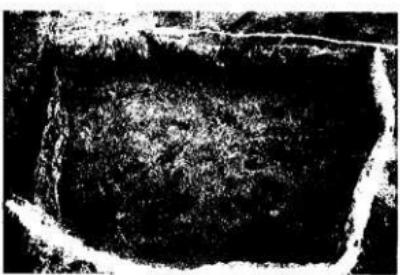
2. H-1号住居址(南から)



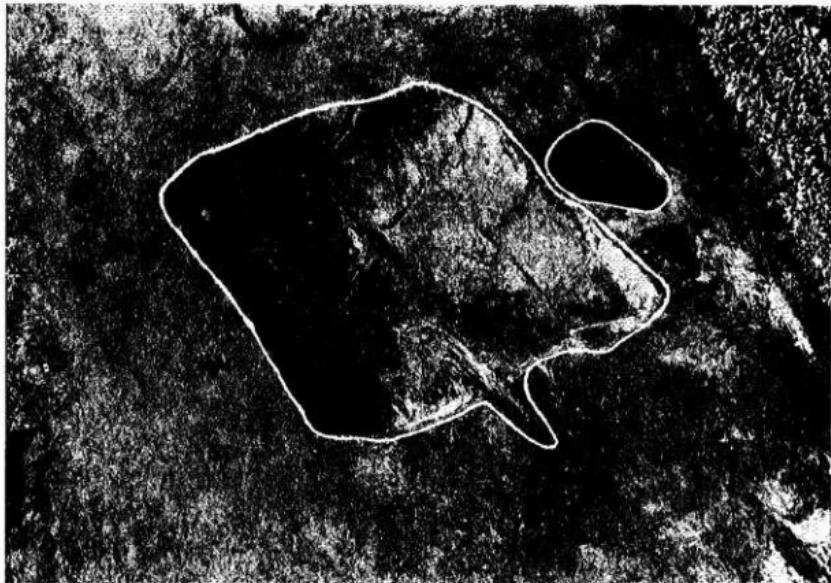
3. H-1号住居址出土遺物



4. H-2号住居址(西から)



5. H-3号住居址深掘(西から)



1. II-2号住居址(東から)



2. II-6号住居址(南から)



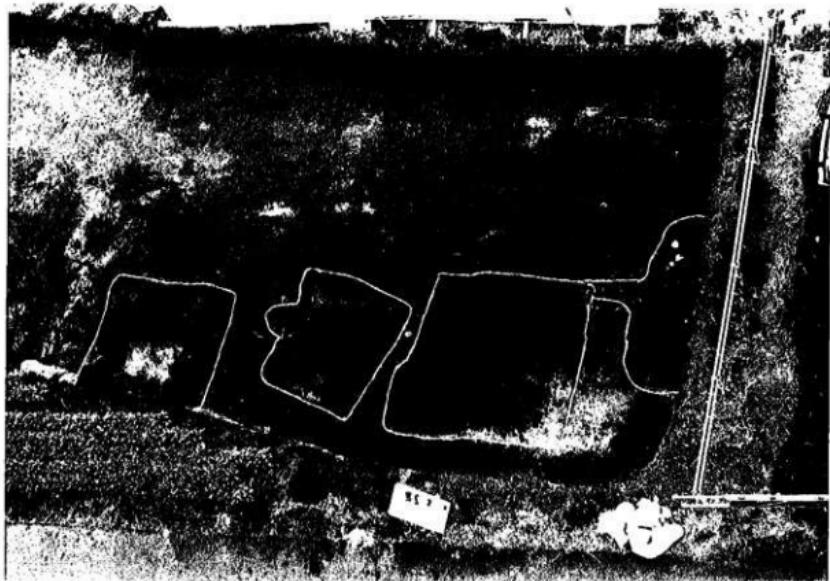
3. II-7号住居址(南から)



4. II-7号住居址(西から)



5. II-7号住居址出土遺物



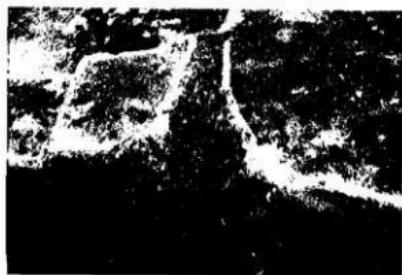
1. H-6・7・8・9号住居址全景(北から)



2. H-8号住居址(西から)



3. H-9号住居址(南から)



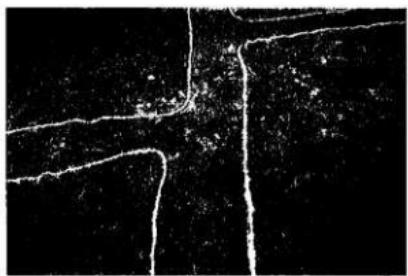
4. H-9号住居址(西から)



5. H-9号住居址出土遺物



1. C区全貌(北から)



2. 水田址跡界



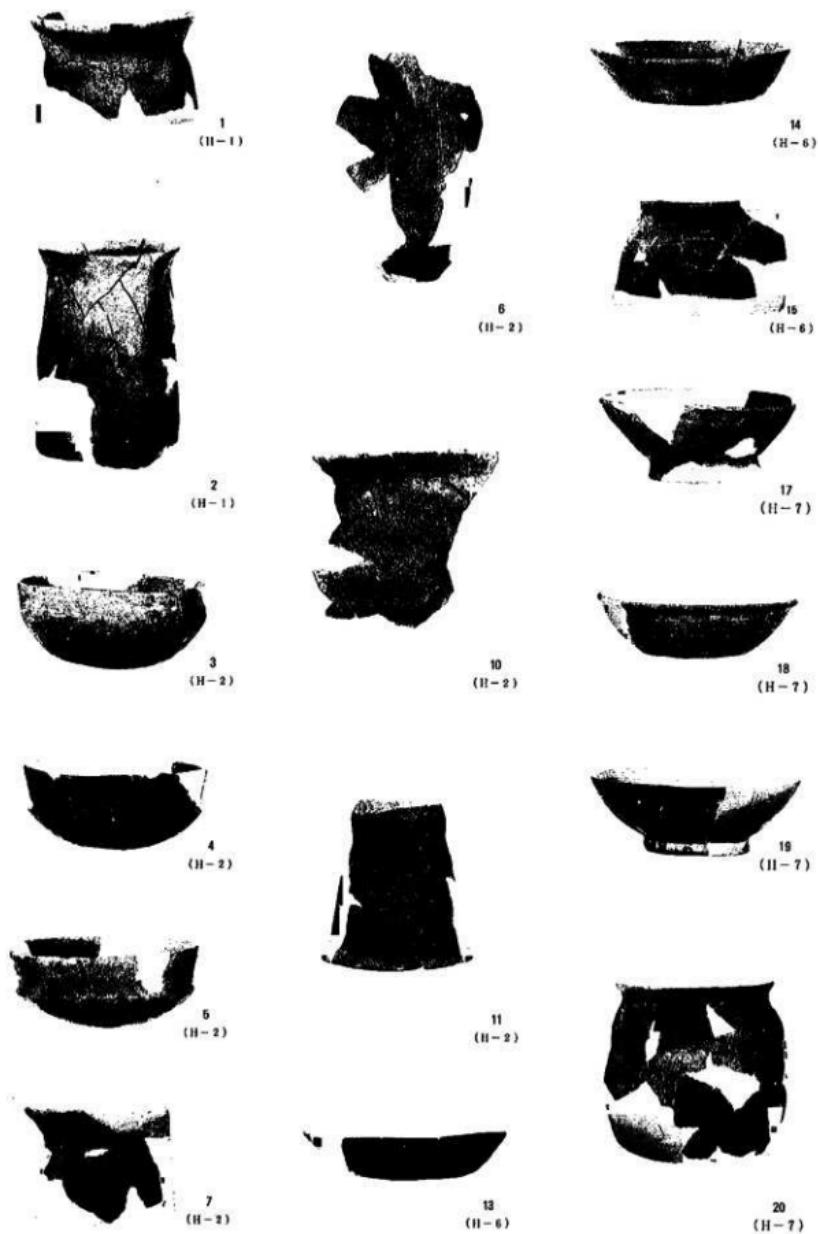
3. 水田址セクション

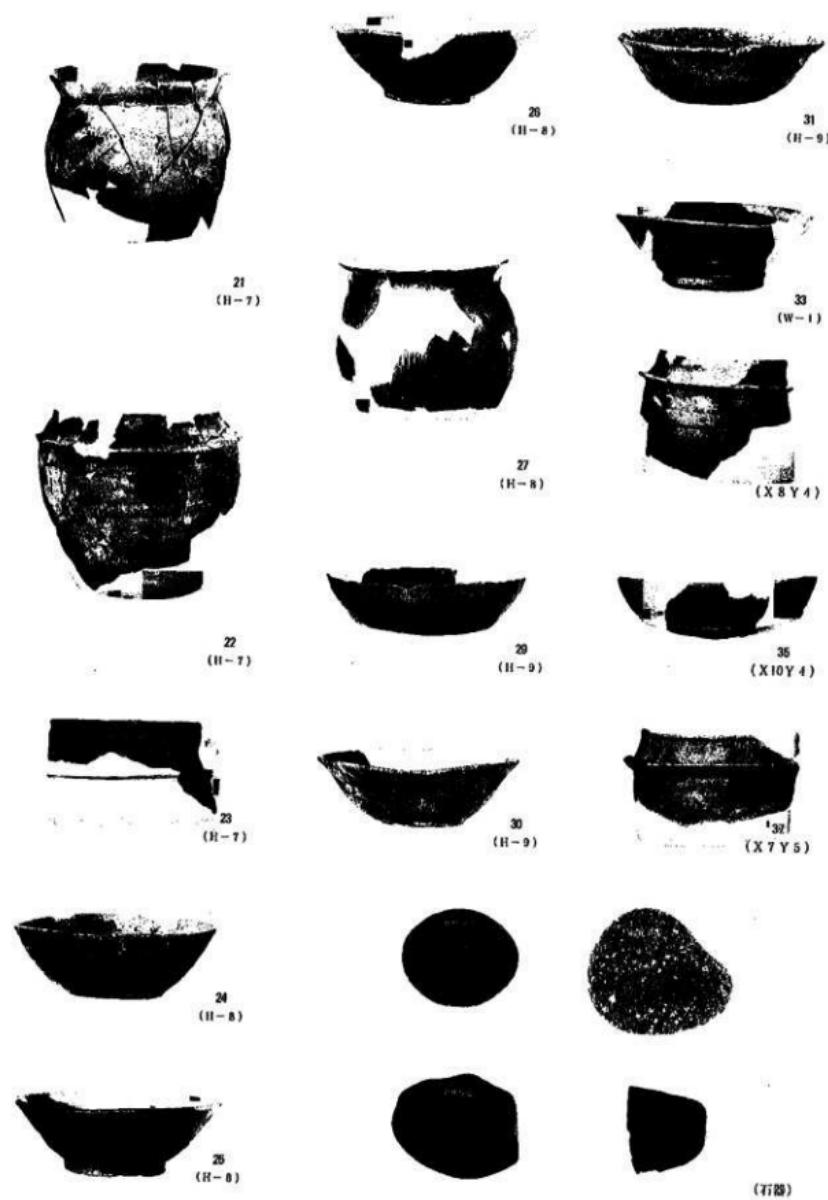


4. D区全貌



5. E区界





## 抄 錄

フリガナ	ハギワラニイセキ
書名	萩原Ⅱ遺跡
副書名	北関東自動車道側道道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻数	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	飯田祐二 佐藤則和
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査團
編集機関所在地	〒371-0007 群馬県前橋市上泉町664-4
発行年月日	西暦1998年3月25日

フリガナ 所収遺物名	フリガナ 所 在 地	コ ー ド		位 置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北 緯	東 經			
ハギワラニ 萩原Ⅱ	マエバシシニノミヤマチ 前橋市二之宮町	10201	9E36	36° 20'54"	137° 10' 14"	19971118 19971218	1,137m <sup>2</sup>	北関東自動車 道側道道路改 良事業

所収遺跡名	種 别	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
萩原Ⅱ	集落址	古墳・平安時代	住居址 8軒	土師器・須恵器	
	水田址	平安時代	水田址 8枚		

---

## 萩原 II 遺跡

---

平成10年3月17日 印刷  
平成10年3月25日 発行

編集発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
前橋市上泉町664-4  
TEL 027-231-9531  
印刷所 松本印刷工業株式会社

---